



Title	大塚賢司さんからの提題
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 8, p. 6-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11608
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大塚賢司さん からの提題

今日お招きに預かってます大塚です。

私は常々哲学が学校で教えられるってということが不思議な気がしています。他の科目に比べて「なんか変だなあ」という納まりの悪さのようなものを、教えていて常に感じています。英語や数学の教師がそれを感じないというのではなくて、倫理はそれに気づきやすいという気がします。

もう1つ初めに言っておきたいことは、学校教育の体系が、「小・中・高」と「大学」では大きな切れ目があり、2つは全く異質の世界であると私は感じております。異なる世界であるわけですが、同じ制度が流れているのですから、つながってはいるのですね。私は同志社高校におりますので、大半の生徒は推薦で同志社大学に上がって行くので、大学の先生から生徒の評判を聞くわけですね。比較的その接続の部分を知りやすいところに

いられるので、そういう意味で私は特殊であると思っています。

今回「哲学の教育」という問題を立てられたことは、たぶんこの2つの違う世界に問題の掛け橋をして、という意味合いがあると思っています。非常に大切なことだと思っています。高校の哲学教育がテーマになっていますが、小中学校での「道徳教育」もありますね。ところがその情報がほとんど入ってこないんです。哲学教育というのは、そういった、小中高に裾野をもった広い価値観に関わる問題と関連する分野だと思っています。

2つの異質な世界に対話が成り立つだろうか心配していて、いくつか議論を分けた方がいいんじゃないかと思ひまして、考えてきました。文脈が3つぐらいあるのではないかと私は思うんです。

1つは「教える」ということ一般。

これは、学校は関係なしに、誰かが誰かに哲学を教えるということが成り立つのであろうか、という文脈。大学でもそうでしょうし、小中高も全部そうでしょうし、人が人の持っている価値観に対して影響を起こしうるのか、という問題になるわけで、これは哲学は教えられるのかという根本的な問いにつながります。

もう1つの文脈は「近代学校教育」という枠組みのなかの哲学教育がどのような意味をもっているか。考えてみれば当然のことですが、近代の学校教育というのは、人類の歴史の中でわずか200年ぐらいの歴史しか持っていない、日本については100年ちょっとしか

ない枠で、そのなかでやっているわけです。そういう枠組みのなかに高校の倫理教育もある。

近代学校教育というシステムから出てきて、みなさん小中高とその洗礼を受けてきているわけですが、学校の教員は「教育目標」を掲げるわけです。実はこうした「目標設定」と「評価」というシステム自体が一定の価値観を刷り込まれていて、それ自体が価値遂行の場になって働きます。教育の場は磁場が働いている。その場を支えるために専門の教育スタッフが養成される。その磁場で、個別に言うと教師の持っている人格とか、授業の時にはしゃべらないようにするとか、細かな問題も含めて、知らないうちに生徒に刷り込まれていくものがあるわけで、それが実はものすごく僕は気になるわけです。

極端なことを言うと今日、日本の教育の現場は殺意が生まれる場です。全国的に見ても、教師が刺し殺されるようなことも、枚挙にいとまがない。それが全部とは言わないが、殺意が生じかねない場です。そういうストレスが溜まりやすい場になっている。そういう場で哲学の教育というのが問題になってくる。

3番目ですが、これはもっと現実的、具体的です。個々の現実の高校教育の中で、公民科のなかに入っている倫理という科目が、教務のなかでどういう文脈であるか。高校教育は文部行政における非常に大きな統制を受けます。大学教育のようにいかないわけですね。具体的に言いますと、「学習指導要領」というのがありまして、法的に拘束を受けます。必ず教科書を買わないと授業をやっては

いけないとか、教員免許のないものにはやらせないということを、強く指導されます。これは年々強くなっています。また、さまざまな教育政策と関わりがあり有形無形の影響を受けます。

倫理というのは、先ほど申しあげたように特殊な意味があって納まりが悪いんですが、文部省には指導要領があって、教科書があって、教科書の指導書もあるんです。それにそってやれば大丈夫というのがある。これは下手をすると非常に官僚的な業務に陥る危険性があります。それに沿っていればどこからも文句がありませんから。そういうなかでわれわれはやっています。

この3つの文脈を私は分けて考えていった方がいいんじゃないかと思います。さしあたって、2番や3番の現実的な問題を考えながら、そのなかで1番目を深化させていくという方法をとったほうが、実りがあるんじゃないかと思います。

私の勤務している同志社高校は、一言でいえば「自由」な学風です。8割5分位の生徒が同志社大学に学科推薦制度で進学していきます。ですから、いわゆる受験勉強ということの心配をする必要がない、ある意味では恵まれた環境にあるんです。ですから高校3年生にもなって討論の授業なんていうのができる。受験とは別の価値観を育てる可能性がある学校であると、私は思っています。

カリキュラムも独自のものが組まれていて、要は幅広くまんべんなく学ぶカリキュラムということになっています。どんな授業が

組まれているかということ、2年生の必須の授業では1学期毎に1テーマに構成していますが、知識理解的要素が重要視される。ある程度基礎的な知識がないと先に進むうえでも困るということをやっています。

知識理解的要素を重視するなかで、それについてあなたはどうか、意見表明したり、意見そのものをお互いに交換したりします。交換といっても討論が成り立つことが難しいので、紙上討論と言って、書いたものを介して、それを特集化してやる、という形をとります。私は初歩的な訓練だと思っているんですが、「書いたもの」といっても普段からノートに出来るだけ書かしているんです。それを随時ノートを見せてもらって、その中でいいやつをコピーして保存しておくんです。

2年生の場合は氏名の公表をしておりますが、これは、氏名を公表すると私は死にます、なんていう生徒がいるんです。最近の生徒はわざと筆跡が分からないようにワープロでびっしりノートをとるんです。それで名前は出さないでということをやっています。

99年度のテーマは、1学期は「異文化理解」入り口として、「さまざまな見解がある中で、自分の独自の主張を持つことの可能性がどのようにあるか」を考えさせることをやりました。2学期は「時間感覚」ですね、「近代社会」のもたらした時間感覚である「せっかちさ」を考えつつ、それを促したものの原因を探る。3学期は、これは今やっているんですが「社会契約説」です。「社会存在としての人間のあり方に注目して、人と人との結びつきのあり様を考える」を置きました。

3年生の選択の授業は意見交換とか意見表明、あるいはレポートの作成、レポートの作成の構想の段階で発表する、そういう方向に、力点・主眼を変えていきます。知識理解は、そういう方向を促すための手段であると位置づけています。

例えば99年1学期は、日本の現代社会のなかで、規範意識がどうなっているのか、特に若者の間でですね、規範意識が問題になっている。学校の現場、生活の枠組みのなかの現場で、彼ら自身に規範というものをどう考えたらいいのかといういことを考えさせた。まだ分析はできていないんですが、かなり面白いものが出ています。また分析してお目にかかるものができればと思いますが、私のほうが教えられることが多いですね。次から次へいろんな分析が出てきて面白いです。

私は大体3年おきぐらいにテーマを変えていきますんで、3年を過ぎると惰性になりますし、生徒にもネタが割れてしまいますんで、3年を過ぎると変えます。「ディタッチメントとコミットメント」というのは、やり始めて2年めです。これは村上春樹という作家がこういう言葉を使っています。これは人間関係に「閉じる」方向か「開く」方向か、ということを行っているんですが、それから大平健さんの使っている「やさしさ」という概念ですね、こういうキイ概念を使いながら生徒たちの人間関係の変容を考えていく。

それから2学期はちょっと意見交換がしにくいものでした。2学期は学園祭があります。学園祭のなかで、生徒は人間関係が壊れることを経験するわけです。クラスの中で、

こっちが参加してよって言って、むこうが嫌だって断ったりですね、それからいろんな齟齬があったり、まあ葛藤があるわけですね。担任が入ったりするんですが、そういう体験を豊富にしているものですから、人間関係についてはひとつの生きた実習をしているわけです。そのとき人間関係をテーマにとりあげた掘下げをやると、実りがあるという面がある。例えば「オウム真理教」に関わる実践をやっていた年も、「個人主義」は正しいかというアプローチをしたのは、そういう文脈も下地にあるんです。

3年生は最後ですからすごく盛り上がる、学園祭でずい分変わります。そのなかでいろんな体験をしていることが整理されていく。それ以前の成育過程ですね、小学校中学校で経験してきた血縁関係、家族関係、そういうものも振り返りながら人間関係のあり方を考えていく、ということでこの機会を利用しています。ディタッチメントとかコミットメントとか、あなたは自分としてどちらかっていうとどれに賛成ですか、ということをお聞きします。

あと、具体的な授業の中でのやり方については、ノウ・ハウですから、あまり哲学教育そのものには用をなさない、けれど実際にはこういうことを通じて教育がされている、ということなんです。ともかく私の方でしゃべっているだけではよくわからない、相手があって、相手がどこで反応を示すか、その反応を組織して活用させていって、さらに次をめざしていく、という投げ返しの枠組みみたいなものがあります。

特に私が重視しているのはノートの使い方

です。板書を写すことは必ずしも強制はしてありませんが、私が授業で取り扱ったことについて、あなたはどうか考えるか、どういう踏み込み方をするか、それから授業でやったことに関して、新聞の記事を見つける、それを切って貼ってまとめるのもいいけれど、ただ自分でどう思っているかを必ず書く、ということで、できるだけ自分の意見も発信できるようにする、ということをおっしゃっています。私は哲学とか高校の倫理の授業の中で目標にしているものは、ちょっと抽象的なものいいになりますが、「自分の頭でものを考える」こと、そのことができるように「育てる」ことと思っています。ただ、それはどういう意味かということ、それは当然必要であると思うんですが、それはまた質疑応答のなかで話していきたいと思っています。

(おおつかけんじ 同志社高校教員)

